

翻訳：イオン・クレアンガ「幼年期の思い出」作品集第2章からの抜粋

著者	HAMCIUC Monica
雑誌名	鹿児島大学総合教育機構紀要
巻	5
ページ	141-143
発行年	2022-03
URL	http://hdl.handle.net/10232/00031853

イオン・クレアンガ「幼年期の思い出」作品集第2章からの抜粋

Monica HAMCIUC

著者について

イオン・クレアンガ（1837-1889）は、ルーマニアの偉大な文学家の一人とされており、「幼年期の思い出」、小説、短編小説などで知られている。葛藤、突然の方向転換、新たな挑戦など、クレアンガという人間は波乱に満ちた人生を送った。1875年頃、クレアンガはオーセンティシティを追求する上流階級の文芸クラブ「ジュニメア」のメンバーとして執筆活動を開始し、比類なき文才で名声を博した。

「幼年期の思い出」作品集は、ルーマニア文学の中でも最もよく知られた一人称視点の物語集の一つだろう。約7年間かけて書かれた4つの章（最後の章は著者の死により未完）で構成されており、ルーマニア北東部のモルドヴァ地方でのクレアンガの幼少期の生活を垣間見ることができる。モルドヴァ地方の方言で書かれており、19世紀前の伝統的な社会の文化、構造、葛藤を描くと同時に、作家自身の人生観や後悔の念も表現されている。以下の翻訳は、「幼年期の思い出」作品集の第2章からの抜粋で、著者は両親のことや、自身のやんちゃでおちゃらけた子供時代について語っている。

本文

夏のモシ祭り¹の頃、僕は家を抜け出して、白昼堂々、父の長兄であるヴァシレ叔父さんのところにさくらんぼを盗みに行った。村では彼の庭の他に2箇所ぐらいにさくらんぼの木があり、その実が「三位一体の日曜日」²の頃に熟すのだ。僕は、捕まらずにさくらんぼを手に入れるために、綿密な計画を立てた。まず、平然とおじさんの家に入り、いとこのイオンと一緒に泳いでくれないかと頼もうとした。

叔母のマリワラが言った。「(イオンは)叔父のヴァシレと一緒に城下町のコドレーニの紡績工場までチュニックを取りに行ったのよ」

僕の生まれ故郷フムレシュティでは、女の子も男の子も、女性も男性も一緒になって糸を紡いでいる。この村では、たくさんのロール状の布や灰色のウールのホームスパンが作られ、フォクシャニ、バカウ、ローマン、トゥルグ・フルモスなど町からやってきたアルメニア人の商人に、メートル単位で売ったり、衣服に仕立てたりしているのだ。僕たちの布は、村や国中の見本市で売られており、フムレシュティの住人は、主にこれで生活を営んでいる。われわれは土地を持たない自由農民と巡回商人で、牛、馬、豚、羊、チーズ、羊毛、油、塩、トウモロコシの粉、布製のコート（膝まである大きなものと短いもの）、タイトなズボン、ナイトガウン、花柄の四角い絨毯や細いランナー、地元の絹で織られた模様の入ったタオル、その他様々なものを取引している。これらを月曜日には市場へ、木曜日には修道院へと持って行く。なぜなら、市場は修道女にとって簡単には行けない場所だからだ。

「それでは神のご加護を、マリワラ叔母さん。いとこのイオンがいないのは残念だね。一緒

¹ モシ祭り：夏と冬年2回に行われるお盆のようなキリスト教の祭りで、亡くなった家族、先祖様のためのミサなどが行われる

² 三位一体の日曜日：復活祭の後の8番目の日曜日

に泳ぎたかったのに」。でも、心の中でこう思った、「やった。彼らがいなくて良かった。もしすぐに帰って来なかったら、それはそれでさらに良いことだ」と。

長話を早めに切り上げると、僕はおばさんの手にキスをして³、従順な少年らしくお別れをし、家を出て泳ぎ場に行くふりをした。が、巧妙にあちこちに身を隠しながら、おばさんのさくらんぼの木にたどり着き、熟していようがまいが、手当たり次第さくらんぼをシャツの中に入れ始めた。僕が心配して急いで作業を進めていると、突然、さくらんぼの木の下に、竿を持ったマリワラおばさんの姿が見えた。

「こいつめ、これがあなたの泳ぎ場なのね」と彼女は言って、僕を見つめた。「泥棒め、降りてきて、教えてあげるわよ！」

しかし、木の根元には地獄と破壊が待っているというのに、どうやって降りろと言うのだろうか。僕が動こうとしないのを見て、彼女は土の塊を2〜3個、僕に向かって投げてきたものの、外れてしまった。そして、彼女は木の上に登り始めると、私に言った。

「待ってなさい、恥知らず、すぐに捕まえるわよ、このマリワラが、今すぐにね」

その言葉を受けて、僕は地面に近い枝に下りると、ズドンッと桜の木の下に生えていた青くて細長い麻の中に飛び込んだ。あの怒り狂った伯母のマリワラが僕を追いかけてきたので、僕は伯母を尻目に麻畑をうさぎのように横切り、庭の奥にある柵まで走った。しかし、それを乗り越える時間はなく、僕は引き返し、また麻畑を横切り、牛舎に戻ったが、そこでも飛び出すのは困難だった。彼女は危うく僕に手をかけるところだったものの、僕は走り続けた。おばさんは追いかけて、しばらくすると僕たちは麻の原っぱ一面を平らに踏みしめてしまった。実のところ、ブラシのような細い麻が600から700坪ほどあったのが、全部ダメになってしまったのだ。そして、僕たちが麻を倒し終えると、叔母は何かの拍子に麻に絡まったのか、何かに躓いたのか、倒れてしまった。その間に、僕は急に回転して向きを変え、2、3回ジャンプをして柵に触れずに飛び越え、一目散に家に帰り、その日の残りの時間はとても良い子にして過ごした。

だが、その日の夕方、ヴァシレ叔父さんが町長と見張りを連れてやってきて、父を門前に呼び出し、事情を話して、麻とサクランボの罰金と損害賠償を支払うよう請求した。マリワラとヴァシレの二人は爪に火を点すような人で、極度のケチであった。僕が何を言っても無駄だった。「人は人、我は我。悪が行われ、その責任を負った者が支払わなければならない。金持ちが払うのではなく、罪を犯した者が払うのだ、と昔の人は言ったものだ」と。

そうして父は僕のために罰金を払い、それでこの件は終わった。父が恥ずかしそうに、そして傷ついて戻ってきたとき、僕にいまだかつてないほどの仕打ちをしてこう言った。「ほら、さくらんぼをいっぱい食べるんだ！これでお前は俺の信用を失ったぞ、この悪党め！お前のために損害賠償を払うなど、二度とごめんだ」

さくらんぼ事件はこうして収束した。不幸にも、母の言葉は現実のものとなってしまったのだ。母は「泥棒は神でも助けない」と言っていた。しかし、死後の悔恨に何の意味があるのだろうか？ それにもまして、僕自身の恥はどうしようもできなかった。叔母のマリワラや叔父のヴァシレ、いとこのイオン、さらには村の少年少女たちと顔を合わせるの嫌でしかたなかった。特に日曜日の教会や、離れて見ているのが楽しい踊り場⁴、泳ぎ場、あるいは「チエルル・ククルイ」でも。

³ ルーマニアには年配の人の手にキスをして尊敬を表す習慣がある。

⁴ ルーマニアでは昔から若い男女が集まって踊る習慣があり、それを子供や大人たちが見守る。

ここは一週間の間、仕事中に互いに恋心を抱いていた若い男女が集まる場所であった。

とにかく、僕はこの悪ふざけでかなり有名になっていたので、恥ずかしくて表に顔を出せなかった。ちょうど村の可愛い女の子が何人か大きくなってきて、僕の心が多少揺れ始めていた頃だった。誰かに聞かれたなら、きっとこのように答えただろう。

「ねえ、イオン、女の子たちが好き？」

「それはもちろん！」

「彼女らはあなたのことをどう思っているの？」

「別に聞いてくれ…」

しかし、時すでに遅し。厚かましくも、何もなかったかのように振る舞っていれば、いずれ皆も忘れたことだろう。だが僕が人生で経験した多くの試練と同じで、一年や二年で終わるような問題ではなく、数年にわたるトラブルの繰り返しであった。僕は気をつけて罣にはまらないようにしていたつもりでも、悪魔が促していたようで、結局たくさんのトラブルを引き起こしてしまった。

さくらんぼ事件の後も、新たなトラブルが幾度も発生した。

参考文献：

1. 原文：Ion Creanga, *Amintiri din Copilarie. Povesti · Povestiri*, Humanitas, Bucuresti, 2014.
URL: https://humanitas.ro/assets/pdf/Ion-Creanga_Amintiri-din-copilarie.pdf (最終アクセス日：2021年11月5日)
2. Camelia Diaconu, *Ion Creangă – viața și operele scriitorului*, 2021年1月21日. URL: <https://www.libertatea.ro/lifestyle/ion-creanga-biografie-3383705> (最終アクセス日：2021年11月5日)